

大人は何を読んでいるのか

成人の読書の範囲と内容

上田修一 立教大学文学部 uedas@rikkyo.ac.jp

抄録

日本人の成人が何を読書とみなしているか、どの程度本を読む人々がいるのか、何を読んでいるのか、読者群は縮小していないかを明らかにするために、二つの調査を行った。読書対象の範囲には、小説などのフィクションをはじめ取り付きやすい本というコンセンサスがある。日本人の4割以上が、月1冊以上本を読んでいる。読んでいるあるいは最近読んだ本は、小説が6割を占め、知識や情報を得るための本は3割程度であった。

1 はじめに

日本では、読書に関する本は、毎年90点から100点ほど刊行されており、読書、出版、書店に関する関心は高い。しかし、読書を専門とする研究領域はみあたらない。図書館情報学の中でも読書について議論は行われている。例えば、『図書館学会年報』では1960年代にいくつか読書論についての論考が載っている。しかし、次第に、子供の読書が中心になっていった。2006年の日本図書館学会研究大会シンポジウムのテーマは、『読書』を研究する意義とそのアプローチ」だった。これは、読書研究全般を取り上げることを意図していたが、結局は子供の読書研究や読書振興の事例を紹介して終わっている。つまり、読書研究とは、子供の読書の研究であるという広い認識がある。この背後には、長い歴史を持つ学校教育における読書指導への関心の高さや1990年代からの国会議員や新聞社が主導する子供の読書推進運動などの存在を指摘することができよう。

しかし、近年、出版界では読書の実態に関心が持たれるようになってきている。近代の日本人の読書や読者の実証的な研究は、永嶺重敏らによって資料をもとに行われてきた²⁾。空白に近い現代の読書実態について、言説ではなく証拠に基づいて実態を明らかにする必要がある。ここでは、大人(20歳以上)あるいは成人が(1)何を読書とみなしているか、(2)どの程度本を読む人々がいるのか、(3)何を読んでいるのか、(4)読者群は縮小していないか、

を明らかにする。

なお成人の読書の実態を調べる継続的な読書調査には、毎日新聞社「読書世論調査」(1947-)、読売新聞社の読書に関する全国世論調査(1966-)、それに家の光協会の「全国農村世論調査」(1946-)がある。いずれも毎年実施され、現在まで続いており、訪問面接法で行われていたが、近年、郵送法に変わっている。

2 方法

次の二つの調査の結果に基づいている。

A 訪問面接調査

1916年8月に全国の20歳以上を対象として調査会社に委託して行った訪問面接調査により1,199名の回答を得た。読書に関しては、この1年間における読書、本の主な入手先を尋ねた後、「1カ月に本を平均何冊くらい読みますか」という設問に月平均1冊未満から月平均11冊以上まで6段階の選択肢を設けて回答を求めた。

性別、年齢、職業、教育の属性データを得ている。男女は、ほぼ均等(男性47.6%)、年齢は、20歳代から50歳代までは、15%ずつで、60歳以上が41%とやや多い。

B インターネット調査

2017年8月に全国の20歳以上を対象とし、調査会社に委託しパネルを使ったインターネット調査で730名の回答を得た。設問と選択肢を以下に示す。

1) 次の中であなたが「読書」とみなすものをい

くつでも結構ですからこの中から選んでください。

[選択肢] (複数回答) エッセイを読む (以下同)、絵本、教科書、月刊誌、コミック、思想書、実用書、週刊誌、辞書、小説、新書、新聞、専門書、電子書籍、百科事典、マニュアル、ミステリ、ライトノベル

- 2) この数年間で読書の量は変わりましたか。
[選択肢] 増えた、減った、変わらない
- 3) 読書の量が減ったとお答えになった方に伺います。その理由を一つだけ選んでください。
[選択肢] 仕事や家庭が忙しくなったから、仕事や家庭が忙しくなったから、字を読むことが難しくなったから、書店がなくなったから、読書に関心が薄れたから、その他
- (1) 今読んでいる、または最近に読んだ本の書名、著者名をあげてください。

得られた回答者の属性は、回答者の性別、年齢、地域、未婚、子供の有無、年収、職業である。

なお、この調査では、事前に、月1冊以上本を読み、なおかつ現在読んでいる(最近読んだ)本の書名と著者名の記入を求める設問があることを伝えて回答可能と答えたモニターにのみ質問している。また、性別および年齢10歳刻みで回答者数が均等になるように調整している。回答者

の居住地域は、関東地方が4割を占めるが、高知県以外の46都道府県からの回答者からなる。

3 結果

(1) 読書の対象

多くの国語辞書では、読書を「本を読むこと」と定義している。実際には、読書の対象の範囲は多様であり、小説や教養書などに限定している人々から、コミックまで広く捉える人々までが存在している。読書対象のゆれは、読書に関する調査の基本にかかわる問題である。

これまでも、多様なメディアをあげて、読書対象と考えるかどうかを問う調査がなされてきたが、公表されてはいない。そこで、18種類の対象をあげて読書の対象に含めるかどうかの回答を求めた。

図1はその結果であるが、「小説を読む」は86.4%の人々に読書と見なされている。しかし、半数以上の回答者が読書としたのは、この中では小説、ミステリ、新書、エッセイ、実用書の5種類に過ぎなかった。取り付きやすさが関係していると考えられる。

なお「小説を読む」を読書とみなさない人々は、「思想書を読む」を読書としているわけではない。

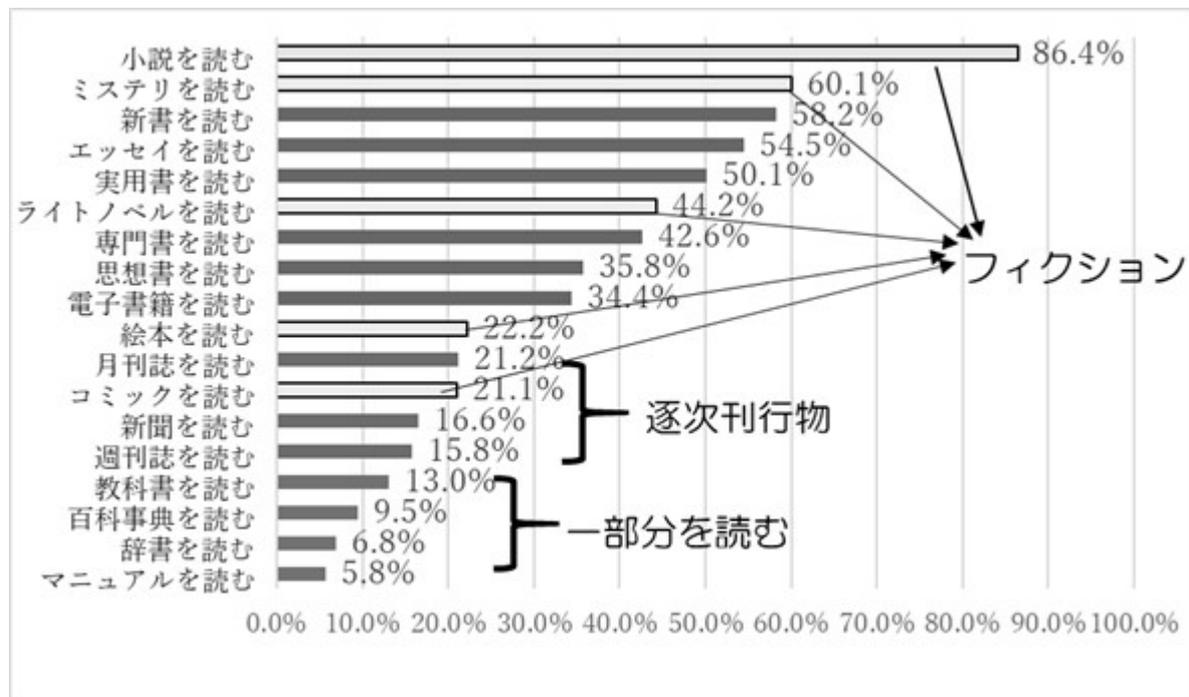


図1 読書の範囲

また、若年男性ではコミックを読書とする例が多かった。逐次刊行物や部分的に読むメディアは読書とは見なされない傾向が強いが、雑誌や辞典を読むことを読書とする人々も一定数、存在している。また、専門書や思想書を読むことを読書と見なすのは、4割前後だった。

性別や年齢層という属性との関係についてコレスポネンス分析を行うと、小説や絵本、コミックと教科書、それに雑誌や新聞は、中心的な読書対象とは離れている。マニュアルを含め逐次刊行物を読書と見なす人々と男性60歳以上と関連がある。また、中心部分では、読書とみなす対象との関連が性別によってやや異なることが示されている。

(2) 読書をする人々の割合とその特性

訪問面接調査で、月に1冊以上を読むと回答した人々を読者層とし、年に1冊未満という回答者を「読書をしていない」人々とする。読者群に属するのは44.5% (533名)、一方、35.9% (430名)は読書をしていない。これを性別、年齢、職業、学歴といった属性で比較すると表1のようになる。

読者は、女性より男性に多く、年齢とは関係しない。「読書をしていない」人々は、年齢を経るに従い減少するが、60歳以上では増える。学生、事務職、

表1 読書をする人々の割合

	人数	読む	読まない
男性	571	48.0%	35.0%
女性	628	41.2%	36.6%
20歳代	128	55.5%	34.4%
30歳代	179	45.3%	32.4%
40歳代	217	46.1%	27.6%
50歳代	183	54.6%	25.7%
60歳以上	492	36.8%	44.9%
農林漁業	24	12.5%	70.8%
商工・サービス業	124	49.2%	26.6%
事務職	239	59.8%	18.8%
労務職	249	35.3%	44.6%
自由職 管理職	34	52.9%	14.7%
無職の主婦	284	39.1%	40.1%
学生	27	77.8%	11.1%
その他 無職	218	40.4%	46.8%
中学卒業	104	24.0%	64.4%
高校卒業	613	36.1%	43.4%
短大・大学卒業	482	59.5%	20.1%
全体	1,199	44.5%	35.9%

自由職管理職には、読者群が多く含まれる。

それでは、月に1冊以上を読むという回答者の割合44.5%は、妥当なのだろうか。国立青少年教育振興機構は、2012年2月に成人読書調査を行った。これは、子供の頃の読書と成人の読書の関係を明らかにすることを目的とした約5,000人を対象としたインターネット調査である。この調査の設問「あなたは普段、1ヶ月あたり何冊くらいの本やマンガなどを読みますか」の回答では、本を1か月1冊以上読むという回答の割合は、71.9%と高い値となっている。多少、時期がずれているが、こうした大きな差が生まれるのは、インターネット調査と訪問面接法の調査方法の違いにあると考えられる。

(3) 読書の内容

インターネット調査の回答者に「今読んでいる、または最近に読んだ本の書名、著者名をあげる」ことを求めた。こうした調査方法では、調査者の意図から外れた回答が多くなることが予想されたが、730名からの回答の中で対応する本を特定できなかったのは5例に過ぎなかった。しかし、著者名と書名を逆に記入した例が21例あるなど、間違いは多く、全体の約1割にのぼった。正確に記憶していない書名、著者名について、挿入されることが多いが、広くみられる普通の現象である。

書名、著者名を確認し、修正を加えた後、タイプに分けた。自己啓発書は、人生論とした。専門

表2 読んでいる本の種類と性別、年齢層

読んでいる本の種類	性別		年齢層					計		
	男性	女性	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上		比率	
小説	201	245	93	76	91	106	80	446	61.1%	
専門書	44	18	18	6	13	10	15	62	8.5%	
人生論	32	22	12	15	7	9	11	54	7.4%	
エッセイ	30	23	1	13	10	11	18	53	7.3%	
実用書	25	27	7	15	11	4	15	52	7.1%	
コミック	14	14	9	9	8	2		28	3.8%	
宗教	4	5	1	2		2	4	9	1.2%	
ノンフィクション	3	3	1	3	1	1		6	0.8%	
絵本	2	3		3	2		1	6	0.8%	
雑誌	4		1	2	1			4	0.5%	
超科学	1	3	1	1	2			4	0.5%	
詩集		1	1					1	0.1%	
不明	4	1	1	1		1	2	5	0.7%	
	各365		各146					730	100%	

的なテーマを扱っていてもエッセイとした例がある。表2にみられるように、読んでいる本の6割は小説である。専門書、人生論、エッセイ、実用書は、区分が難しく、まとめれば、約3割近くになる。これらは、知識や情報を得る目的で読まれていると考えられる。

小説や専門書では男女差があり、年齢層では、30歳代が小説、専門書を読む割合が小さく、20歳代はエッセイをほとんど読まない。コミックは、50歳代まで読まれている。

なお、読書対象の出版年は、約1/3の標本調査では、2017年の出版が約4割、最近5年間では7割に達した。

(4)読書量の減少

読者群の減少を実証するには、経年変化をみなければならぬ。毎日新聞読書調査では、1年に単行本を1冊以上読んだとする回答者の割合は、1980年から2015年まではほぼ30%台を上下している。

表3 読書の量の変化

この数年間で読書の量は変わりましたか。		
単一回答	回答	割合(%)
増えた	135	18.5%
減った	259	35.5%
変わらない	336	46.0%
計	730	100%

表 読書の量が減った理由

	性別		年齢層					計	
	男性	女性	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	回答	割合(%)
仕事や家庭が忙しくなったから	58	69	38	29	31	21	8	127	49.0%
SNSに時間をかけるようになったから	3	13	6	4	2	1	3	16	6.2%
字を読むことが難しくなったから	15	19			7	5	22	34	13.1%
書店がなくなったから	4	4		1	1	4	2	8	3.1%
読書に関心が薄れたから	18	28	4	10	4	14	14	46	17.8%
その他	13	15	4	5	1	6	12	28	10.8%
計	254	217	52	49	46	51	61	259	100%

今回のインターネット調査では、読書をしている人々を対象としているので、この数年間の読書の量の変化を尋ねた。「変わらない」が46.0%を占めるが、「減った」(35.5%)が「増えた」(18.5%)の倍近くで、全体としてみると読書量は減っている。「減った」理由としては、「仕事や家庭が忙しくなったから」が49.0%で最も多いが、「読書に関心が薄れたから」(17.8%)で二位であり、SNSや書店の閉店の影響は小さかった。60歳以上の人々の多くは、読書量の減少の原因を、自由回答を含め、加齢によると回答している。

4 考察

読書対象の範囲は、小説などのフィクションをはじめとした取り付きやすい本というコンセンサスがある。日本人の4割以上が、月1冊以上本を読んでいる。読んでいるあるいは最近読んだ本は、小説が6割を占め、知識や情報を得るための本は3割程度である。自己啓発のための読書は、一定数あるが、かつての修養的な読書や古典、翻訳小説は、ほとんどみられない。

この調査では、読書量の減少がみられた。読者群は縮小しているとみられるが、その実証にはコホート調査が必要である。

なお、二つの調査の概要と集計表は、『読書と公共図書館利用報告書2017』³⁾に掲載している。また、一部の調査結果(原データ)は、立教大学の社会調査データアーカイブ RUDA から入手できる。

本研究はJSPS 科研費15K00453の助成を受けて行った。

- 1) 第54回日本図書館情報学会研究大会シンポジウム記録：「読書」を研究する意義とそのアプローチ：今あらためて「読書」を問う。日本図書館情報学会誌 Vol.53, No.1, 2007. p.51-73.
- 2) 永嶺重敏. 雑誌と読者の近代. 日本エディタースクール出版部, 1997. 281p.
- 3) 読書と公共図書館利用報告書2017.

<http://user.keio.ac.jp/~ueda/papers/readingreport2017.pdf>